

福島原子力事故を受けての世界の反応

各国の原子力産業に従事する女性の視点

WiN Global、WiN Japan 会員 エネルギー広報企画舎
森崎 利恵子

世界各国には、共に原子力産業に従事する女性の仲間がいる。約一年ぶりに再会した彼女たちは、福島第一原子力発電所事故の影響を受けながらも遅く前に進んでいた。そんな彼女たちの姿を目の当たりにし、日本の私たちも、震災事故の戸惑いや不安を拭い去りきれない中ではあるが、世界の仲間たち以上に頑張らなくては、と奮起させられた。

原子力産業に従事する女性たち

WiN

二〇一一年六月六日から一〇日にかけて、ブルガリアでWiNグローバルの年次大会が開催された。WiNとはWomen in Nuclearの略で、原子力・放射線利用の仕事に携わる女性の国際的なネットワーク。原子力の平和利用を推進するという立場から、女性と次世代層を主な対象として、原子力の理解活動を行っている。WiNグローバルは、一九九三年にヨーロッパで誕生。以来、各国支部が設立され、現在は八〇か国に約三〇〇〇名の会員を擁している。

WiNジャパンも二〇〇〇年に五四名（賛助会員、賛助機関含む）で立ちあげられ、現在は小川順子会長（東京都立大学）のもと、一四〇名（同）の会員を擁するまでになっている。

基本的にWiNは、それぞれの国の支部が各々のやり方で理解活動を行っているが、年に一度、WiNグローバル年次大会で一堂に会し、各国の原子力情勢やWiN活動内容、最新の技術について情報交換するとともに人的ネットワークを広げている。定期的に参加していると互いに顔と名前を覚え、国を超えた連帯感が生まれる。原子力産業では女性は

マイノリティであることが多いが、世界にはこれだけの仲間がいるんだ、と力が湧いてくる場でもある。今年は二二か国から約一五〇名（うち、WiNジャパン六名）が参加した。当然のことながら、福島第一原子力発電所の事故は話題の中心となった。

各国の「フクシマ」への関心、反応セッション初日、東日本大震災の犠牲者に対して黙とうが捧げられた後、WiNジャパン五名が壇上にあがり、「フクシマ特別セッション」として事故の状況や放射性物質による環境への影響、得られた教訓等について発表した。会場からは、「避難者はいつ家に戻れるのか」「作業にあたる人員が不足するのは」「WiNグローバルとして何か協力できることはないか」など、心配の声や有り難い申し出などが寄せられた。

また、毎年恒例となっている各国の原子力情勢やWiN活動を報告するセッションでは、二〇か国が報告した中で、ほとんどの国が「フクシマ」という言葉を発し、半数が事故後の対応など具体的に紹介しており、各国における関心の高さや影響の大きさがうかがい知れた。

例えばWiNカナダは、福島への募金を集めるため五カナダドルのプレスレットを作成し、この年次大会までに五万カナダドルを売り上げたそうだ。売り上げの最終目標は一〇万カナダドルで、収益金は福島地域の復興のために寄贈する予定とのこと。そのグレーのプレスレットには、日本とカナダの国旗、そして日本語と英語で「力強い友人」と記されており、すでにカナダの一人一人以上の手がこのプレスレットがあるのかと思うと胸が熱くなる。

またWiNスイスの代表としてプレゼンしたのは、スイス科学技術アカデミーの副会長であり、WiNグローバルの初代会長。言ってみればWiNの母である。スイスでは国民投票で過半数の賛成を得ていた三基のリブリース計画が福島事故で停止されたり、連邦議会が二〇三四年までに原子力発電所を段階的に止めると決定したりと、原子力政策への逆風は厳しい。しかし彼女は、「原子力発電所の段階的停止の代わりを、果たして政府が言うように省エネ、水力、太陽光・風力で賄えるのか。冬季は日照時間が五時間ほどのスイスでどうやって？」と冷静だ。長年、科学技術界に貢献してこられた彼女の言葉は力強く説得力があり、安全で経済的な電力供給については、スイスでも論理的検討がまだまだ必要のようだ。

この他、予定していた女性セミナーのテーマを急遽「スマートグリッド」から「福島事故」に変更したり、メディアに積極的に関わって正しい報道をサポートしたり、Webを活用してFacebookやホームページで福島事故情報の発信や質問回答をするといった国もあつた。福島事故の影響を大きく受けながらも、各国のWIN会員は誰も私たち日本を責めたりせず、それぞれ国の事情ややり方に応じ、立ち向かっていた。

WINから日本への支援

今大会期間中、WINグローバル理事会からの発案により募金箱が設置され、各国の参加者からユーロ、ドル、ウオン、ブルガリアレヴァ、スイスフラン、チエココルナなど各国の通貨で寄付をいただいた。寄せられた金額は日本円に換算して約五〇万円。その半分以上が近隣国の台湾と韓国で、微量とはいえ放射性物質到達がもっとも懸念されている国々である。彼女たち自身の日常業務でも相当の影響が出ているはずであるが、彼女たちはアジアの友人として日本を心配してくれていた。寄付金については福島第一原子力発電所で復旧作業に当たられている方々のために活用するべく、WIN

ジャパンを通じて東京電力に贈ることとなった。

また、WIN各国の会員は募金の他にも、慣れない手つきながら一生懸命折り紙で鶴を折ったり、東北地方で震災復旧に当たっているWINジャパンの会員などに向けて励みや慰労のメッセージを寄せたりして下さった。手書きの癖のある文字のメッセージは、何とも人間味に溢れ、心温かく、私たちの心を打った。

未来の原子力のため、心を一つに

WINグローバルは、今大会の締めくくりとして「フクシマ宣言」を採択。これは、現在も福島第一原子力発電所で奮闘している方々の努力と勇気を称賛するとともに、原子力ルネサンスの追い風から一転、福島事故を機に原子力を取り巻く情勢が変貌する中、今後の産業の発展のために国際標準の安全基準や規制の制定にあらゆる努力をし、子どもたちの将来のためにも強力な支援と貢献をしていこうと謳ったもの。参加者たちは、原子力産業に従事する一員とし

て、心と力を合わせてこの局面を乗り越える努力をしていくことを宣言した。今大会に参加したWIN会員約一五〇名が各国でこの宣言の志を広め、多数の女性が力になってくれることを期待したい。

* * *

今回は、福島第一原子力発電所の事故について、WINジャパンも発災国として説明責任があつた。東京電力の会員はもちろん、他の電力会社の会員も海外出張などできる状況ではない中、何とか参加できる会員六名が政府や東京電力などが発表する情報をかき集め、整理し、発表した。もしかすると、私たちが提供する情報よりも、より最新の情報を有する立場の海外会員もいるかもしれない。でも何もしないわけにはいかない。ただその使命感だけで六名は参加したのだと思う。

そしてWINにおける日本の責任は今大会のプレゼンで終わりではない。来年のWINグローバル年次大会は「フクシマのその後」が大きなテーマになるはずだ。奮起させられた私たちが何をなし、そして何を次の年次大会で発信するのか。WINジャパンの使命はこれからも続く。



国際原子力機関（IAEA）
天野事務局長と懇談

ブルガリアでの年次大会に先立ち、WINジャパンの会員七名は、WIN IAEAの尽力のもと、IAEA天野事務局長と懇談することができた。

懇談の中で天野事務局長は、事故発生後早々に帰国して菅総理と会談し、IAEAとしての協力を申し出たことや、客観性・透明性を高めるために国際専門家チームを派遣した経緯などを振り返られた。

また、「エネルギーセキュリティの問題や地球温暖化の問題は依然存在しており、原子力の必要性は変わらない。であるなら、やはり『福島を契機に原子力の安全性はさらに高まった』と言えるよう、今後さまざまな取り組みが必要となる。IAEAがその中心的役割を担っていきたい」と積極的な姿勢を示された。

日本国内でこれからの原子力の方々の方向性が示されない中、私たちは天野事務局長の言葉に光を見出すことができたと思う。今こそ日本ができること、日本にしかできないことの実現のために、引き続き原子力の理解活動に尽力していきたいと、気持ちを新たにしたい。